



繪本自來也說話

後編

四



遠 13
1910
101



明へ 13
浦
巻

報仇
守談
自來也 說話後編 卷之四

武江

感和亭 鬼武著

勇呂吉郎 到相摸國 温泉場併 不圖入仙境 条

勇侶吉郎ハニ総國天眼坊の方ホあり々るグ累ホ痔疾起リ

難義ヨ及ビぬレバ天眼ト商義做一摧ク湯治セんと相州

底倉の温泉ハ痔疾ヨ妙アリと聞クれバ這ホ到リヤと

上総國を立出那地へ趣死湯治一疾を神ひけ候ガ

侶吉ハ摧ク底倉逗留の中近邊を歩行リ一鬱と氣を

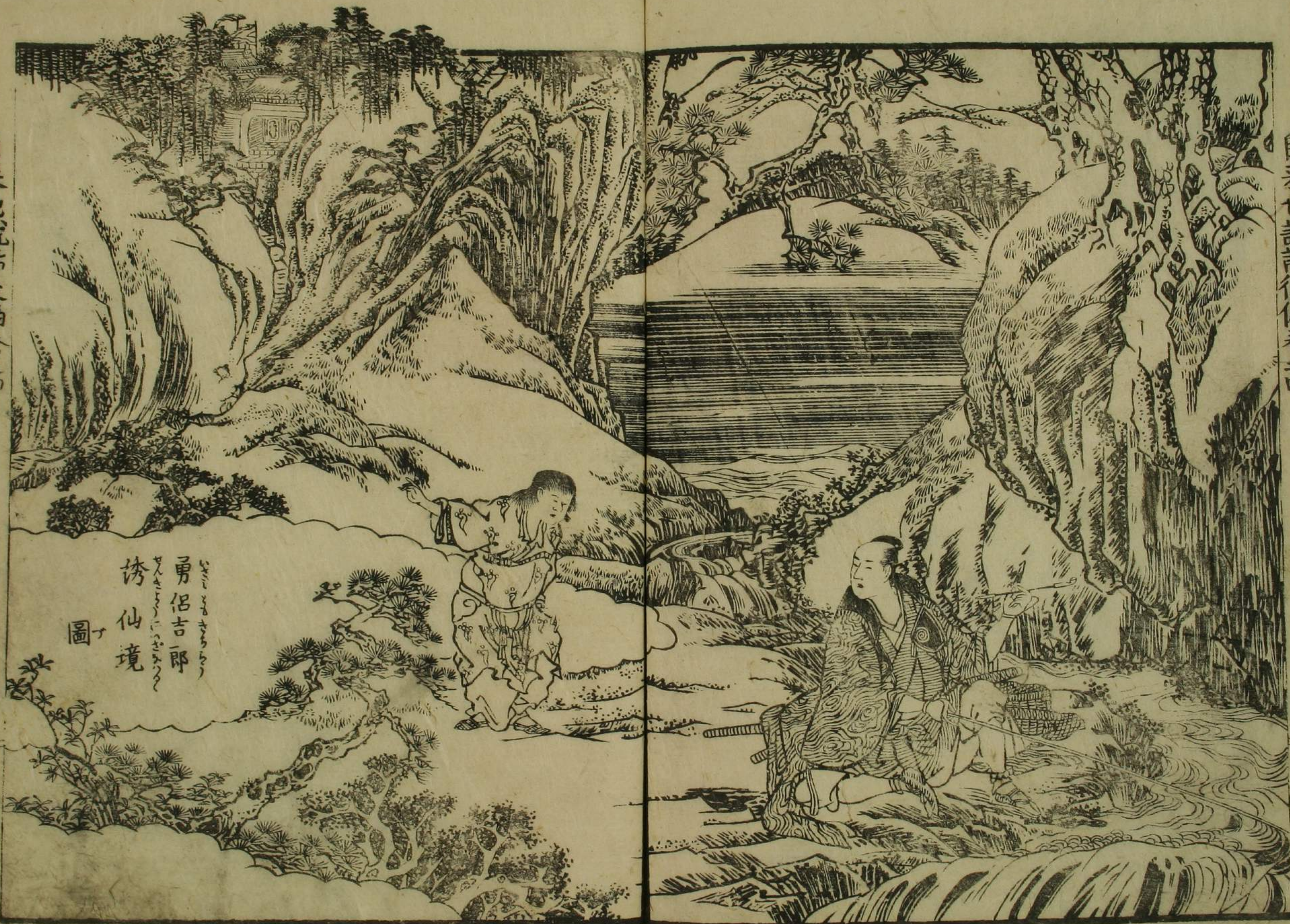
散ゼんと一日谷川ヲ漁ると一山間を奥深く入處

忽拵と一個の位高死童子頭を川邊ホ立ク其前此所

自來也 說話後編 卷之四

魚の集る所ありと教へ侶吉は附巡りたるすまじり何んりの童と
心得ありき侍處へ復一個の童子来りて刑童子よしく
何れも客人を迎へ不來也君も侍兼まへ老早伴ひ侍れ
よしよまことや予を越せしごとありなれば原の童子侶吉は
い〜君權し予行處小到り誘ひ予囑る人脚身を遠く
一獻をも勸えたるんと予を越せし〜のど先刻より
魚做しよ妨あり老と此更遅延せりと申めぞ侶吉は
富邊りの童子等と想ひなれば侍ひ渴小及ひゆるゆ〜茶
一服をいやすさんと何心なく那二個の童子は誘引
山深く到る處小遙向りよ一の樓門へ侍れば這山中へ
斯る大家のありぬるハ如何ある人の家あるんと童子は向ふ
茲社我等が住所ありと〜程あく門前小ゆり〜れを
門を守の人童子は向ふ〜何處の人を伴るやと
尋ねハ君の命を慕ひ孝士を請へ到ると谷るめを門を
守るもの忽地上に拜伏し〜礼を做しよ立里子等侶吉
を延連門内子入ぬれハ中の動靜を看てある小復棟門
高く麗を双へ練堀四下を躲し門内乃破ハ玉を散轉
ごとく正面ハ石をりて墨目あれぬ樹木生茂り更ふ
此世界のさるふ〜ごまハ這也狐狸の予を誑めや遮莫
何程の更あ〜んと想ひお連入碼頭の階を渡れハ瑠璃乃

此世界のさるふ〜ごまハ這也狐狸の予を誑めや遮莫
何程の更あ〜んと想ひお連入碼頭の階を渡れハ瑠璃乃



勇侶吉郎
誘仙境
圖



其二



戸張のと尊妃玄園の邊は道人とも可謂人多く居並ぶ列位
侶吉は礼を行ひ此を過さば奥の方より蘭麝の薫り
吹送り、救多乃仙女ともくくる美女立出君侍りも
もづれハ疾済せぬと侶吉を奥深く伴ひの大坐は情
孝子来りぬめと呼ぶも亦道人の如人立出何の福
有く這よ到りぬめと主人も大は飲躍無程拜面ありと去捨
奥より入り童子等茶を運び且兼て用意ありとこく
酒者を双の器物の結講言計あり侶吉も音夢の心地
稀有の姿小到りしと景を取締夫一挨拶述べは
慶へあこし美女立出主人音今拜謁做申さんとあれば

さつと入らせぬと奥深く大坐へ請ひ侶吉安んて構
待居るも其香四下は薫り遙小音楽列奥の方より
許すの仙女乃とこ人取圍一個の美女身は綾羅錦繡を
纏ひ頭は玉の簪を覆いと殊勝ある仙女のさぬ僻静と
歩出大坐の中英は坐し侶吉を看て恭しく礼を
做じ不想起侶吉も自務と俄頭し礼畢る后那美女侶吉は
つらつと早此所はありと脚身を待たえし今日福ひは相
見ごととを得て予心忽雲霧を拂ふが如くとありと是は
侶吉のえとく其不友の小人何の能らありとくかく慇懃
款待ぬやと叫びとぐねが脚身へ祖父母母の仇を報い

忠孝全く義勇氣備へ義士あり故に平筆斯る
 有名の士相見え欣躍の余り僥い此邊に到りて
 同僚り童子をして送つて一免一酒を献じ半片其志を
 述るのこころ美酒長者をりて食應善そそそ
 美女等も樂を奏せしめ誦杯做させぬも人信吉も
 意饒帝醉るごとく予不圖天人鬼よつとぬるうと疑
 さらめくも此邊の何國もて列位ハ奈何ある人又侍人や
 御身の上をも語り同くいと何い多ぬれ主女つとく愛を
 相州之柄の山中もて出身今僅よ未行ありしと想いぬらんが
 原漁ありし一妻あり十有余里の道法を隔る仙境あり
 予の頭は霜雪の白髪不生顔は年波の皺を不寄といふも
 平う歳己は疾五百歳を保従ふ者衆皆二百歳乃
 星霜を經りて前小法身を運つる童子といふも
 百歳を運り越り斯山中に老を養平日霞を
 吞芳林含且諸國を遊歴し世のこゝろを知るがゆ
 小御身の此に到りぬ人を運り終るは身之恩
 人尾形寛行の義氣勇極といふも邪術を行ひ盜賊を
 業と許すの人は害あれは道に迷ふ乃罪天誅を脱れ
 予此程天文を窺ふ小近は小篠倉石堂家なれぬ
 夏を煮出し其身も終る亡し此夏も告ぐ

せんと言ひ誘引侍りぬ茲は延替御身の忠孝天示
通し富貴其身を不離且齡ハ百歳を保つ今
予此蓄を去つ侍れ平日常是を以て頭を捨擲めん
時幸諸病の患を拂ふありと承し畢て那頭を
頂する玉簪を去るれば侶吉を以て取て押哉百謝く
のちのち々々寂早日もたけあんよ平小暇ありんやと
あり々れの主女笑く曰由身此は到りてを今日と想ひんや
疾三日を過りてと臥て侶吉も驚き實や星霜其牙小
積るも不知仙境斯やありあん列位乃長壽を
保てるも理ありと々々退坐の礼畢て立出んとする小

原の童子等門外は送り導出れ那所を顧る小樓門と
看し處も雲霧霞ひ躲し々々不知其處斯て詭
歩行と覺れ童子等々々々々脚身の客舎此より
程近々々々々々我々々々々々暇やとんと別れを告立帰るを謝
見送る小岩石嶽々々々々山中平地は等しく恰も風の吹送る
とく速小走る其行方を失ふ侶吉ハ惘然と果れ立上り
一が衛一程の途をりて免立帰るとする小貴客何処小
到り人と呼ふもぞ心を止る這を觀る小前は温泉ふ
浸り寓りくる客舎あり々々々々倍不審あり一動靜を
說話那玉簪を出し々々々々々々々々寓家の者皆之這り

數十里を隔り當国足柄の山奥少々仙境ありて悪人
此小到る時多々笑ひを笑ひ人至る時ハ福しを得ると
兼く傳へ侍人ガ君入らざりて其仙境小をてあふ
先し人々殆奇異の想ひをぞ做しつりて

吾川宋男逢難併石里野破之助妻環救宋男条

去程小吾川宋男と暗小篠倉小到り何卒一の巧を
石堂家へ歸余口んと心掛武運禱りの字免編笠小面を
躲し恐る禱る岡小幡宮社条做し拜畢く階を下んと
まゐる時適つる頃江の島小あゆみ宋男小討まは
俠客鶴の模平が義児等四五個共連此社内へ到りしが

階の下より宋男の上より下り来るを不圖笠の中を半面
這を看跟て低言合梁ハ模平其外我ハ仲尚を半小
掛立退る石堂家の浪士吾川宋男小相違る能
所ありて出逢り模平の敵あれば茲處少々廝併
友とちの義を立んと門前小待伏しあるともし知れ
立出る宋男を取巻我ハ法身の半小うけらと模平の
義見ふれん首徒の敵道しやとと援連討りくる小ぞ
宋男ハ不想掛災難小詮そぐあく下昂の身とぞ敵あり
そのくくやと笠脱捨抜合て切結ぶも果喧嘩もと鶴ら岡
乃街家ハ門戸を鎖し八幡宮の門前大小噪動凡宋男条弱

吾川宋男
ハトコダテ
与俠客
喧嘩之
圖



の生れおまじし武家小育る撃劔の技ハ得しる更那れバ
強氣ありとつし使客共ハ刃の道小味く宋男小
切巻れ這者口惜し縣令之訟ハ搦捉んと一個走出せ
是小連く残る者共續く逃行故宋男も更を好小
あゝさふ長追せば此場を避んと想ふ處ハ疾この
噪動同く縣吏等宋男を搦捕んと十午捉索お振
走向し宋男這より道をアく道る小處あく如何せん
跟蹤折柄這より石堂家の臥石里野破之助の妻環と
つくるもの供人多く延連轎釣せ今日落る岡
八幡宮へ糸伯あり賽の義表前斯る噪々何更と
流石ハ武家の奥床しし不噪動靜僥倖此人を憑
這物を遁せんと走寄る宋男狼藉者小出逢難美の
某武家方と見請頼牛のく權一の予を困躰
ふらまこと云環と顔見合し仰天做し這者環度して
侍人ら面目あしと乃逆手取直し自救とあるを
環押止妹汀を延連立退のくあは刺人を過し曲者
自害とハ更可笑や女小こそあれ破之助の妻の環生
捉く衛へ曳んと女小稀ある強力よく苦も腰刀抛放し
其俣物せし轎へ宋男をお込下部おのえく大切の
囚人多ねの公を跟しとある處へ追く走来る縣吏等發後

少の模平の義児共環の前後を押取卷密今省交傳
 二人を過し曲者を躲狩り入と覺つるり速小吊く
 小渡さねんや若抵頼玉つて手は做しとも接んと
 詰拭ねん環半点不噪這者根藉ある方く我妻の石堂
 晴泥の臣万里野破廣之助とつるりの妻小侍よがうらも
 密今妾扱し轎へ乗込し當藩中吾川采男とそ入を
 者少く土る頃衛を出奔其上人を害せしとの責を
 捕捕家風小行んと乃夫破廣之助主人より此役義を
 蒙り當時草を分付る在處を捜し求める采男おねん
 侍女那うらも妻めし捕衛延連侍人より此上

あも恨藉あつて縣吏連用捨うし妾御対するあり
 とつんと埋の草扱うる一言ふ縣職寺の園口做し
 斯る責とん不存ゆへ先刻よりの無礼の罪を饒し
 あせりしありある上の石堂及乃家風小仕さるへし
 と衆皆手持あし立帰れん環の轎の中ふ望し
 此難を避んがう先發する女力淺智去
 那うし妾の想ひの子細も傲れば暗小衛え伴ひ
 ちの心短氣を吐しあふと申合く轎急
 急衛をさしそ立帰りぬ

自來七言後休之

環枚宋男
吏職義論
之圖



仁木胤遠と石堂暗服結婚併自來也慶金仁木

家人而奪贈物条

其頃伊豆國の城主仁木胤遠の息胤行方へ石堂暗服乃息女
玉琴縁組ありて姻を結べりて義植公より命出さる
ふより両家難有御請做し速に仁木家より結納の
験石堂へ贈るるに鎌倉中よ汝汝あはれ兼て鎌倉小
入はあり自來也の手比者此更自來也の方へ考知
侍るありり大小欣躍早う公願の期至りぬと僕小
賊を何れべ自來也商義做しけるに當時發行する
仁木石堂の縁組乃音物と必定金銀器物巻物の類に

若于大金の品物あるべし這を途中に待伏奪ひ取らん
あはれども名不負仁木の家柄あはれは可然武士監押
可考へ必定ゆれば衆皆無油断をを用ひ働くべし
功小因り賞を行んと手筈を極自來也許すの
小戒を惹連安房國裾山を立出鎌倉松葉谷の邊
小身を躲し其時をぞ窺くる然るに仁木家にて
吉辰を撰び結納の形に取揃へ物頭高宮矢柄と
つるるりのふ足燈教十人若添石堂家へ婿とんと
せはあを老早も自來也が小同取鎌倉街道撞突
山とつる形に多く小唄唄を従へ待ともあはれ



自來也
奇術鹿金
仁木家隸
之圖

仁木の家人等此處ふ牙掛ね盗賊ども前後より
 立頭と道を遮り仁木屋より石堂後へ因の飲
 悦申述んと特く這まぎ出迎ひ侍人ありと一
 義あもも不及拔連く切て掛るあぞ仁木の家人等
 不想寄振藉ふ忙慌逃迷人を追跑押浩切立る
 物頭高宮矢柄這を着る推余ある山城どももの
 牽動るふ誠の武士の手並をふらりと隨ち取て
 馬來廻く進掛る小城を十個討忽突伏或も
 手を負せ予不續と足腰を従へ勇を揮ふるを
 号勢の盜賊を四方八埏小追崩して這勢い小

賊ども風ふ木の葉の散るどくく追巻るねく散乱
 せろを自來也撞突山ふあ川く此光景を觀る
 よりも天ぬ向つて咒を結ひ呪文を唱へ腰鎧を
 拔く四下を拂へバ這者不審哉陸地忽大河と
 あり洪水漲り仁木の家隸水ぬ浚る根根を
 得るりと城等ハとつて返く此小押浩老那所
 小切伏さくも勇ある矢柄を始一個も不殘討取ハ
 復自來也の呪文ふつて今迄溢れく大水も元の
 平地と干揚りく残る仁木の贈物と殺十個の
 死骸の枕を双べありく結納の品く若干

奪ひ取死骸の衣類も逸く剥取跡取斤解させ
 自來也ハ小賊を轆ろ暗小の〜予今日斯く
 計い〜散て結納の取物を目掛るの〜小可
 此取くを此候小女等ハ仮ハ仁木の家隸と詐り
 假粧使者とあ川ろ石堂家ハ入込動靜を窺ひ
 来る〜予ハ跡より胡妻歌々助り後とも別小
 一の計畧を行ひ汝等も大金を得さるべ〜と
 謀を承〜小城等小立別を松葉谷へ延取ぬ

自來世説話後篇卷之四 畢

